ているのもこの研修の特徴です。

技術の習得も大事ですが、そういった考え方を学び取ってもらうことが我々の目的です。

発掘技術者研修 「測量外注管理課程」

この研修は、遺跡測量を外部へ発注する際に、1）適切な仕様書が提示できること、2）成果品が点検できること、のために必要な基礎知識と実務を習得するのが目的です。基礎知識を得るためには、測量の実際を体験することが理解への近道ですので、班に分かれて実習をするわけですが、今年はある班で水準測量の成果が悪かったために、日没後に再測するというようなハプニングもありました。測量の実際は体験すればよい、という程度に考えていましたが、結果があまりにも悪いと、どうしてもやり直したいというのは人情であろうと思われます。

実習風景

実習は二段階に分かれています。一つは、光波測距儀を使って宮内を1 kmにわたってトラバースする基準点測量を想定した作業、もう一つはその路線上のある地点を発掘の現場に見立てて平板測量や細部測量に用いる図根点を増設する作業です。後者の測距にはスチールテープを使います。水準測量は全路線にわたっておこないます。

ここ数年、わが国の測量システムが変わり、世界測地系へ移行することが話題となっています。本研修課程でも毎回それについて紹介してきましたが、2001年6月に法律が国会で承認され2002年4月より実際に施行されるという状況になったので、今回はより切実に受けとめたようです。しかしながら、実際にはどのように対応したらよいか分からないというのも、正直なところです。

将来の測量の方向を示すものとしては、GPSと3Dスキャナーを紹介することが必要と考え、今回はいつものGPSに加えてスキャナーの実技見学を取り入れました。使用した機種は1 mm以下の精度でコンターが描けるという点で目新しく、遺物の測量への応用を考えた研修生は多くいました。

発掘技術者研修「官衙遺跡調査課程」

専門研修「官衙遺跡調査課程」は10月28日から11月2日までの延べ11日間の日程を無事終了しました。国府から郷関係官衙遺跡に及ぶ地方官衙遺跡の発掘調査や研究上の専門的な知識や技術を習得するための研修で、山形県から熊本県までの研修生18名が参加しました。そのほとんどが当該遺跡の調査経験があったり、これから調査にあたろうとする者であり、熱心な反応がみられました。

外部・内部の各講師による講議・実習・現地見学とも大変好評で、これまで見過ごしてきた発掘調査上の留意点や視点を学び、新たな目を開かれたとする感想が多く、この研修の継続を要望する意見も少なくありませんでした。今回も、古代建築構造の講義と春日大社着到殿での実測実習とを組み合わせたカリキュラムは、上部構造との関係を考えながら建物遺構の調査にあたる必要性を体得でき、大変有意義であったとする声が目立ちました。今回は、研修生同士の経験交流や情報収集が時間不足とならないよう、研修生自身による事例報告と意見交換の時間を増やしました。この方法も毎回好評で、研修に対する意欲を高める上で、また研修生相互のネットワークづくりにも効果的であったと思われます。

最近の地方官衙遺跡調査では末端の官衙関連遺跡が大きな問題となってきており、研修生からの質問や悩みもこうした遺跡に関するものが少なくありませんでした。この分野も講義では取り上げているものの、まだ明確な遺跡の性格判断などの方法は確立しておらず、こうした研修生の要望に応えられる基礎的な研究も重要な仕事であることを痛感させられました。

特別講座「遺跡の保存と活用課程II」

この研修は、各地の遺跡整備・活用の事例を取り上げて討議することを通じて、遺跡の整備手法や遺跡の活用法に関する専門的知識と技術を習得するとともに、遺跡整備の理念や遺跡の再生に向けた展望についても探ることを目的にしたものです。11月7日・8日の両日、遺跡整備活用の沿革についての講

義ののち、大分県安国寺集落遺跡、福岡県平塚川添遺跡、群馬県保渡田古墳群、大阪府新池埴輪窯跡、千葉県上総国分尼寺跡、岩手県志波城跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、沖縄県首里城、の６つの遺跡についてそれぞれの復元整備例や活用の現状と問題点などが報告されました。

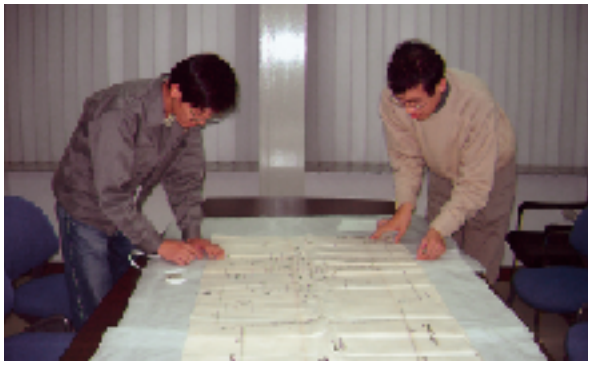
その後、全国各地方ごとの遺跡整備の現状をコメントしたパネリストも加えて、遺跡整備の理念、遺跡復元の技術・手法、整備した遺跡の維持管理の方法、遺跡の活用などを主なテーマに討議をおこないました。参加者約100名で、遺構復元と遺構保存とをどう調整するか、遺跡保存とバッファーゾーン確保の問題、史跡公園とテーマパークとはどうちがうのか、などが議論されました。この研修で一定の結論が得られたわけではありませんが、遺跡の整備活用をどうすべきか、という問題は各地で直面している悩みであるだけに、時宜を得た企画として有意義であったとの感想が多くありました。ただし、日程の制約で討議が必ずしも十分深められなかったという指摘もあり、今後改善すべき点であります。

この研修は、研究集会方式という新企画のものでありましたが、こうした研修を今後積極的に進めてもらいたいとの声が多く、これから他の研修においても前向きに検討すべき点であると思われます。

（埋蔵文化財センター）

興福寺所蔵絵図の調査

文化遺産研究部歴史研究室では現在、興福寺のご厚意により、興福寺所蔵の140点におよぶ絵図類を調査しています。１点１点について、ラベルを貼り、基本的な書誌事項を調書にとり、写真を撮影する作業を順次進めているところです。



興福寺所蔵絵図の調査風景

それらの絵図の過半は、興福寺の子院を描いた指図です。寛政３年（1791年）に各子院の指図を一括して作成しているようです。境内や建物の輪郭を描いた、図としては簡略なものですが、面積・長さなどの書き込みがあり、当時の各子院の敷地・建物の状況を知ることができます。

明治維新までは、興福寺の寺域は現在よりもはるかに広く、現在の裁判所・県庁・文化会館・美術館・国立博物館・奈良ホテルやその周辺は、すべて興福寺の寺域だったのです。しかし興福寺はそのように大きな力を持っていたがために、明治維新の廃仏毀釈の際には、寺の存続さえ危ぶまれる危機に見舞われます。その後関係者の努力によって、また寺勢を盛り返していることは周知の通りですが、興福寺旧境内地の景観が、昔と今とではすっかり変化してしまっていることは事実なのです。

近世以前の興福寺は、広大な寺域の中に、100あまりの子院が所狭しと立ち並んでいました。それらのうち、興福寺の中心伽藍や、一乗院・大乗院などの主要院家については研究も進んでいますが、以外の中小の子院については、よく分からない点が多いのです。今回の絵図類からは、それらの子院１つ１つの状況を詳しく知ることができます。まだ調査途中で、私たちも詳細を把握しきれてはいませんが、近世興福寺全体の景観を復原する上での、基本資料になるのではないかと思い、日々はりきって調査にいそしんでいるところです。　（文化遺産研究部）

中国河南省文物考古研究所との共同研究

奈文研と中国河南省文物考古研究所は、2000年度から５カ年計画で鞏義（きょうぎ）市に所在する唐三彩窯及び出土品に関する共同研究を実施しています。昨年度は、

鞏義市黄冶窯出土唐三彩